

おおむら・たくや

1982年生まれ。写真家。
大学で土木を専攻。卒業後、写真撮影に針路をとる。大学4年間で苦勞して修めた構造力学の知識を生かして、雑誌取材を中心に土木の施工を撮影している。

[撮影地]静岡県焼津市小浜

© OMURA Takuya



静岡市と焼津市との間に続く大崩海岸は、その名の通り、今にも崩れつきそうな断崖絶壁が続く。古来より東海道を行き交う人びとは、海沿いのこの難所を避け、山越えの峠道を利用してきた。

峠道は2ルートある。一つは海岸から1km離れた日本坂峠を通るルート。日本武尊が東征の際、通った伝説が峠の名の由来だというほどその歴史は古い。だが、平安時代以降、海から5

kmほど内陸側にある宇津ノ谷峠を通るもう一つのルートが整備されると、日本坂峠を通るルートは東海道として廃れてしまったそう。日本坂峠の標高が高く、道が険しいことがその一因だろう。

日本坂峠のルートが再び日の目を見るのは、明治時代以降のことだ。ただし、そのルートは険しい峠道ではなく、峠の下を抜けるトンネルに代わる。トンネル長を短くかつその前後の高低差を小さくできる日本坂峠周辺の地形は、鉄道の建設に有利だった。現在では、東海道新幹線や東名高速道路など日本の大動脈が吸い込まれるように集まっている。宇津ノ谷峠のルートも国道1号として健在だ。

そして今、これらルートは歴史的に大きな転換期を迎えつつある。建設中の第二東名高速道路は宇津ノ谷峠よりもさらに内陸側を通り、加えて計画中のリニア中央新幹線は南アルプスをもトンネルで貫くかもしれないからだ。道の変遷は、その時々土木技術を物語っている。

「文・写真」大村拓也